

博多「唐坊」と蒙古襲来

“Tang-Bou” in Hakata and the Mongol Invasions

安野 眞 幸*

Masaki ANNO

【梗概】

蒙古襲来に至るまで、博多には宋人たちの居留地「唐坊」が作られていた。宋人たちは日本社会の内部では権門の神人・寄人として編成されており、東南アジアにおける「唐坊」と比べて博多の宋人たちの発言権は弱く、博多「唐坊」には自治権や治外法権は認められていなかった。蒙古襲来を契機として、博多に居留していた宋人たちは大挙して日本に帰化し、博多の「唐坊」は居留地としての面影をなくした。

【キーワード】

蒙古襲来, 宋人, 帰化, 唐坊, 居留地

目次

はじめに

- 1 分析の視角—なぜ蒙古は博多を襲ったのか—
- 2 博多「唐坊」の研究史
 - (イ) 亀井明德氏の考察を中心に
 - (ロ) 大庭康時氏の考察を中心に
 - (ハ) 林 文理氏の考察を中心に
- 3 「野上文書」の分析

むすび

はじめに

今これから問題とする博多「唐坊」とは、九州最大の都市博多成立の出発点となった中世前期の《博多浜》にあった《港市》のことである。中世の博多「唐坊」は巾着袋のような博多湾の奥にある《博多浜》上に立地していた。古くは今の中洲辺りには大きなラグーンが広がり、那珂川や石堂川がそこに注いでいた。住吉神社はそのラグーンの南岸に立地し、ラグーンの西側には福岡城や鴻臚館の建つ高台がそびえ、ラグーンの東側から北を塞ぐように立地していたのが《博多浜》である¹⁾。つまり博多「唐坊」は大きな巾着袋＝博多湾の中にある小さな巾着袋＝ラグーンによって、二重に玄界灘から保護されていたのである。

林文理氏は論文「博多綱首の歴史的位置²⁾」において「11世紀後半の時期は博多・福岡の地域史にとって《鴻臚館の時代》と《蒙古襲来の時代》の間の《博多綱首の時代》と位置付けられ」と明言され、蒙古合戦下において博多綱首たちには「強制送還」や「収容」が、博多「唐坊」には戦火での「焼失」や「政策的解体」の可能性があったとし、さらに「蒙古襲来以降、貿易拠点が《博多津唐坊》のあった陸側の砂丘《博多浜》から、海側の砂丘《息浜》に徐々に移動していったことは、文献史料や考古学の発掘成果から確認される事実である」と述べて、博多「唐坊」は蒙古襲来によって終焉したとしている。

大庭康時氏も論文「集散地遺跡としての博多³⁾」において、日宋貿易における輸入品全般にわたり、博多が

* 弘前大学教育学部社会科学教室 Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

唯一の発送基地であった住蕃貿易の終期は「元寇の時期と重なる」としている。本稿では博多「唐坊」と蒙古合戦との関係を「野上文書」の中の弘安四年九月の「御教書」の分析を通じて考察したい。その分析に入る前に、まず最初本稿における私の分析視角を述べ、次いで佐伯弘次氏の研究⁴⁾を前提とし、研究史を整理しながら、博多の宋人居留地である「唐坊」について多少の考察を試みたい。

§1 分析の視角—なぜ蒙古は博多を襲ったのか—

江戸時代初期は中国史では「明」から「清」への王朝変化の時代に当たっている。明が漢民族の立てた「中華帝国」であるのに対し、清は中国東北部、満州の女真族の建国した「征服王朝」で、女真族の風習である弁髪を漢民族に強要するなどの問題を起こした。この「明」から「清」への王朝の変化は単純でなく、大陸部での両者の帰趨が明らかになった後でも、明朝の末裔たちは海外に拠点を移して抵抗を続けた。中でも台湾を拠点とした鄭成功の活躍は有名である。当時明人の居留地のあった長崎においても、明の滅亡に際して大量の明人が日本へ帰化した⁵⁾という。

この明から清への王朝の変化とよく似た現象が、漢民族の国「南宋」が滅び、北方の遊牧民族モンゴルによる征服王朝の「元」が中国を統一した際にも見られたはずである。しかし我々の歴史学会では、「博多綱首」と呼ばれた宋人貿易商たちの居留地が博多にあったことは問題とされているが、蒙古襲来の事実には圧倒されてか、古くは国難、鎌倉武士の蒙古撃退、神風、ナショナリズムというパラダイムによって、新しくはアジア諸民族の元に対する抵抗運動等々には関心が向いても、国内のマイノリティーである中国人居留民の動向には関心が向かっていない。

二度の蒙古合戦がなぜ博多を主戦場としたのか、こうした問いが立てられなかったこと自身、これまでの歴史学の問題性を表していると私は思う。博多のそばには大宰府があり、古代から現代に至るまで常に福岡・博多は西国・九州の中心地であり続けた。だから博多の取り合いが日元間で問題となり、博多湾に防塁が築かれたのだろうか。国と国と云う大きな力がぶつかり合うとき、二つの世界の狭間に居る少数者には、常に被害者以上の役割は用意されず、また記録・史料上には何の痕跡も残らないのが一般だと思う。しかし問題がなかったわけでは決してありえない。

明代の記録には、かつて博多には「大唐街」があったが今は日本社会に同化しているとある。しかし「倭と為った」契機や理由については何も記されていない。時間が経てば自然と「倭と為る」かのような書き方である。しかし二度にわたる蒙古合戦において博多が主戦場に選ばれた最大の理由は、当時博多が日本で最大の貿易港で、ここに日本最大の中国人居留地が築かれていたからだと思ふ。日本征服を目指す元の立場に立てば、日本列島の中で一番味方に付け、組織しやすい人々のいたのが博多の中国人居留地で、彼らの組織化が日本征服のポイントであった。

在留中国人たちがどちらの側に付くか、二度の合戦の度毎に日本側も元側も厳しく問うたはずである。鎌倉幕府は元の使節を切り捨てる蛮行を行なったが、幕府の断固たる決意表明だけではなく、これは博多の在留外国人たちへの見せしめであり、日本への帰化の要請・恫喝であったのではなからうか。それゆえ博多「唐坊」が「倭となった」直接の契機は元寇で、これを機に在留中国人たちが大挙して日本に帰化したことが「倭となった」原因だと私は思う。つまり元寇を機に、日本居留宋人たちは日本へ帰化し、博多の唐人街などの中国人居留地は消滅したと思うのである。

§2 博多「唐坊」の研究史

網野善彦他監修の『よみがえる中世《1》東アジアの国際都市 博多⁶⁾』によれば、中世の博多には中国人の居留地があったことは明らかである。その最大の根拠となっているものが博多浜を中心とした博多遺跡群の存在で、ここでは11世紀後半から13世紀にかけての遺物を出土している。これに対して、それ以前の時代の遺物は鴻臚館の遺跡から発見され、鴻臚館貿易の存在が跡付けられている。考古学の大庭康時氏³⁾は「鴻臚館の遺跡では、11世紀前半を最後に遺物・遺跡が見られなくなり、その役割を博多に譲ったことが知られる」としている。

最近の学会では、この《博多浜》における宋人居留地を「唐坊」と呼ぼうとの説が有力である。このアイデアを最初に提案されたのが考古学の亀井明德氏⁷⁾である。それゆえここでは先人の研究を、(イ) 亀井氏

の考察の紹介を中心としたもの、(ロ)最近の考古学の成果を発表した大庭康時氏の考察³⁾を中心としたもの、(ハ)文献史学の立場からの林文理氏の考察²⁾を中心としたもの、の三点にまとめてみたい。

(イ) 亀井明德氏の考察を中心に

亀井明德氏は論文「日宋貿易関係の展開⁷⁾」において、宋商を鴻臚館に安置し接待した上で行なう、鴻臚館における大宰府主体の貿易を「波打際貿易」と名付け、これとの対比において、博多に長期にわたり居住する宋商人の「博多綱首」が、貿易の主体となって日本国内の流通課程にまで入り込んで行なうものを「住蕃貿易」と名付けた。「唐坊」とは、当時宋の海商たちが朝鮮・カンボジア・インドネシア・ベトナムなど東南アジア各地に中国人居留地を作り、倉庫・店舗・住居を構えていたものを云うが、これと同様なものが博多にもあったとしたのである。

この「唐坊」とは、唐末にイスラム商人たちが華南の貿易港に築いた居留地「蕃坊」や、新羅人たちが黄海沿岸に築いた「新羅坊」に対応するもので、「蕃坊」がそうであったように自治が許され、また東南アジア各地の港に見られたように、居留地の長老がペルシャ語で「港の王」を意味するシャバンダルとして、現地の王から港の支配を任されていたはずである。それゆえ博多「唐坊」においても、綱首のなかでも最も徳望のある者を選んで責任者とし、大宰府がそれをオーソライズする形態、つまり治外法権を持つ租界的聚住形態があったとされた。

さらにこの「坊」字からは、現在全世界に多く見られる中国人居留地「中華街」と同様、東西南北に直交する方形地割の街区⁸⁾のイメージさえもが浮かんで来る。中国人の好む世界観から、この方形地割は導かれるのだが、博多「唐坊」にそこまでの想像が許されるだろうか。確かに、唐末のイスラム商人や新羅商人の来航に影響され、中国人海商もまた積極的に海に乗り出し、宋代に入ると、海洋帝国宋を中心に「東アジア交易圏」が作られたことは事実である。東南アジアの各地には宋人の居留地が築かれ、中国人海商の海外での一時的居住を「住蕃」と云った。

宋人の博多「住蕃」の事実は、永長二年(1097)閏正月六日に大宰権帥源経信が大宰府で没したとき、『散木奇譚集』の詞書に「博多にはべりける唐人どもあまたまうで来てとぶらひける」とあることから確かめることができる。しかし厳密に云うと、「住蕃」は必ずしも「唐坊」とは結び付かず、原理的には「住蕃」しても集住形態をとらず、現地人と雑居することもありえたはずである。また集住が許されたとしても、近代における上海租界のように居留民の側に治外法権が認められ、自治権を持った独立した法圏として居留地が認められたか否かも問題である。

つまり博多「唐坊」には、「唐坊」という言葉から、単なる日本在留宋人たちの集住地なのか、あるいは自治権が認められ、港務権を持つシャバンダルが存在し、方形地割の街区であったか、等々の問題が出て来るのである。『宮寺縁起抄』からは仁平元年(1151)九月二十三日に筥崎・博多一帯において大追捕が行なわれたことがわかる。川添昭二氏⁹⁾によれば、大宰府の目代宗頼の命により、検非違使所別当安清・同執行大監種平・季実らが、五〇〇余騎の軍勢を引き連れ、筥崎・博多の大追捕を行ない、「宋人王昇後家より始めて千六百家の資材・雑物を運び取る」とある。

ここから「千六百家」が総て宋人の住宅だとは断定出来ないが、博多周辺の都市化の事実、「宋人王昇後家」に対して治外法権は適応されず、検非違使が大追捕を行なったことを知ることが出来る。以上のことは「博多綱首」と呼ばれた博多在住の宋人貿易商の日本におけるあり方や、亀井氏が「住蕃貿易」と名付けた貿易の仕組みと密接な関係が出て来る。「博多綱首」の日本におけるあり方については(二)で取り上げたい。また「住蕃貿易」に対する批判や「唐坊」が自治権や治外法権を持ったか否かについては(ハ)でそれぞれ取り上げることとした。

中世日本の「住蕃貿易」について、初め亀井氏は11C後半以後博多以外にも可能性はあるとされたが、日宋貿易は明州と博多間を結ぶ航路を唯一の軸として行なわれたこと、他に遺跡が確認されないことから、後になって「唐坊」の存在は博多のみであると訂正された。これに対して柳原敏昭氏¹⁰⁾は、南薩摩の万之瀬川下流域の持躰松遺跡が宋人居留地であるとの可能性を精力的に模索している。

(ロ) 大庭康時氏の考察を中心に

博多駅から北へ延びる「大博通り」地下鉄工事に伴う博多遺跡群に対する考古学的な分析から、11世紀後半から中国人街が築かれたことがわかる。大庭康時氏の論文「集散地遺跡としての博多³⁾」によれば、宋商らの集住エリアは「博多浜西側の櫛田神社・冷泉津と東側の聖福寺・承天寺にはさまれた500メートル四方の地域」で、「周辺からそこだけを隔離するような施設を伴っていたわけではなく」「最初冷泉津の湊沿いに始まったものが、まず浜沿いに南に拡大し、ついで東に広がった」、「東に拡大した時には、すでにそこに住んでいた日本人との混在・雑居が生じた」とある。

博多遺跡群から出土する遺物に、陶磁器類には日常生活用具としての碗、皿、小鉢、すり鉢、こね鉢、盤、鉢、急須、水注、壺、甕などのほか、宋商の身辺愛用品と思われる玩具、水滴、灯火器、天目茶碗などがあり、全国的にもまれな大型銭が出土し、これら大型銭を含めた博多の銭貨は、北宋における基準価値のまま発行後間もなく貨幣として流通したとある。博多遺跡群からの出土遺物にある木製の結桶は、日宋貿易で輸入品の外容器として持ち込まれたものが、井戸の井側として再利用されたものという。亀井氏も博多遺跡群から出土する唐代以来の中国系統の瓦に注目している。

それゆえ以上から、宋人が博多で商品貯蔵庫を併設した中国風の家を構え、井戸を掘っていたと考えられよう。大庭氏は博多「唐坊」は宋社会の延長として築かれ、宋人たちの定住生活の場であったとし、「貿易都市としての博多は、宋商人の居住によって誕生した」と宣言している。日宋貿易が盛んになるにつれ、博多「住蕃」の宋人も増え、11世紀後半からは急激な都市化が進み、博多に宋人の居留地が作られたことは確実である。一方、日本人との混在・雑居の根拠に挙げられるのが、11世紀前半から13世紀にかけて《博多浜》に見られる土壙墓・木棺墓である。

その埋葬様式は全国で検出されるものと変わらないことから「日本人の墓制」で、それが博多浜西側に営まれていないのは、「唐坊」の最初の位置が博多浜西側であったことを裏付けるとある。墓制との関連で問題となるのが博多聖福寺の創設に関わる榮西申状である。聖福寺の開山は榮西、開基檀越は源頼朝である。建久六年(1195)六月十日榮西は申状を書き頼朝の袖判(承認)を得た。その状に「博多百堂の地は宋人が堂社を建立した旧跡で、空地として星霜を送ったが、仏地であるため人が居住していなかった。そこで堂舎を建立し本尊を安置し、鎮護国家を祈りたい」とある。

川添氏¹¹⁾は「形式その他検討を要する文書であるが、同寺地が宋人集住地に属する仏地であったことは認められよう」としている。それゆえ宋人は《博多浜》西側に居住し、博多百堂を仏地としていたと考えてよいだろう。なお川添氏¹²⁾は「唐坊」における租界的性格が綱首の寺である聖福寺や承天寺において表れたとの考えを出されている。一方、戦国期の聖福寺には寺内町が存在が明らかである。それゆえ寺の境内は、後の長崎における「岬の教会」と同様、貿易品の市場の立つ場所であり、だからこそ内外を区別する掘りや土塁があったと思う¹³⁾のだが、後の考えを待ちたい。

博多遺跡からは多数の宋代の陶磁器が発見されるが、中には高台部に「丁綱」41点をピークに「王・陳・周太・李綱・朱・馮綱・王綱・周綱」等々の人名を記した墨書陶磁器がある。この「綱」は組を表すことから、丁某や李某を中心とする商人組織が考えられ、亀井氏はこれを「宋商船に混載された品物の混乱を防ぐために、一括して梱包されたうちの一個に記された略表」とされた。それゆえ博多の宋商は明州の商人組織の出先で、明州に本店があり、博多はその支店の可能性が強いのである。

ともあれ、宋商らの集住エリアが「博多浜西側の櫛田神社・冷泉津と東側の聖福寺・承天寺にはさまれた500メートル四方の地域」とする考古学上の知見は、「大唐街」が箱崎にあったとする通説の《大唐街箱崎説》、さらにその根拠となった明代の記録と対立する。そこで次に、明代の兵法書『武備志』と『日本風土記』を取り上げたい。『武備志』では日本の三津「坊津・博多津・安濃津」を紹介し、「中津」の博多津には「大唐街」があったとして次のようにある。

花旭塔津為中津，地方広闊，人煙湊集，中国海商無不聚，此地有松林，方長十里，名十里，有百里松，土名法哥煞機，乃廂先也，有一街，名大唐街，唐人留彼相伝，今尽為倭也。

この「花旭塔津・法哥煞機」はそれぞれ「はかた・はこざき」の日本語の発音を写したもので、「廂先」は

筥崎と云う地名の意味を中国語訳したものである。ここからは通説の大唐街箱崎説が考えられるのだが、佐伯弘次氏⁴⁾は必ずしもそうでないとする。氏によれば1621年成立の『武備志』よりも早く、1592年以前に成立した明の『日本風土記』には次のようにあり、『武備志』はこれに倣ったものだという。

我国海商聚住花旭塔津者多，此地有松林，方長十里，即我国百里之状，名曰十里松，土名法哥煞機，乃廂先是也，有一街，名大唐街，而有唐人，留恋於彼，生男育女者有之，昔雖唐人，今為倭也。

佐伯氏は「有松林」は「此地」の説明だが、「有一街」もまた「此地」の説明だと云う。この解釈により江戸時代の貝原益軒以来の《大唐街箱崎説》は覆り、考古学的な事実との整合性を保つ《大唐街博多説》が成立するというのである。現在は博多と箱崎の間には石堂川が流れており、博多と箱崎を区別するのが自然ではあるが、大宰府宝満山に源を発する御笠川・比恵川の下流石堂川は、昔は今の博多駅の辺りから住吉神社の前を流れ、那珂川下流域に広がるラグーンに流れ込んでいた¹⁾という。それゆえ博多浜と箱崎は小さい入り江を挟んでむしろ連続していたことになる。

これら明代の『武備志』や『日本風土記』の理解では、「大唐街」は時間と共に日本社会に同化したとなるが、既に述べたように「大唐街」は蒙古襲来による焼失、幕府による政策的な移転・移住等々によって終焉し、《博多浜》の時代が終わると次の《息浜》の時代になったと考えられている。

(ハ) 林 文理氏の考察を中心に

現在日宋貿易の日本側の貿易制度については、亀井氏による「住蕃貿易」説と、林文理氏による「権門貿易²⁾」説が対立している。亀井説は鴻臚館貿易、波打ち際貿易との対比の中で、日本に長期居住する博多綱首を貿易の主体としたのに対し、林氏は「博多に荷揚げされた貿易品（唐物）は日本側の手で流通・販売されており、日宋貿易の主導権は博多綱首などの中国側にあつた必要はない」とし、日本国内への流通・販売は山僧・日吉神人・八幡神人が執り行なったとした。亀井説に対する林説の特徴は、視野を日本における輸入品の販売ルートにまで広げたことにある。

博多綱首が輸入陶磁器の荷揚げ・荷解きを中心とし、一旦蔵に収めた窯出しのままの製品を完全な商品にまで仕上げる仕上げ行程をも執り行っていたのに対して、日本国内への流通・販売は山僧・日吉神人・八幡神人が行っていた。また博多綱首も権門勢家の神人・寄人となっていたことから、日宋貿易全体は日本側においては、中央の権門勢家が博多現地の大宰府府官層と結合して執り行っていたとされたのである。このような理解に立てば、宋人貿易商「博多綱首」の日本社会における社会的な発言権はあまり大きくなく、「唐坊」が自治権を持っていた可能性は少ない。

ところで「唐坊」の存在を証明するものは、平安後期から鎌倉前期の日本側文献史料からは未だ発見されていないのである。つまり、同時代の日本人たちは「唐坊」の存在に気がつかなかったかのようなのである。しかし、滋賀県大津市西教寺所蔵の「観音玄義疏記」上巻の奥書には、永久四年（1116）五月十一日に「筑前国薄（博力）多津唐房大山船龔三郎船頭房」が有智山明光房の唐本「観音玄義疏記」を書写したとあり、ここに「唐房」の文字がある。既に亀井氏もこれを「唐坊」と同じものと見做したのだが、その前提の上にこの十七文字について考察を加えたのが林氏である。

当時博多に居留した宋人貿易商を「博多綱首」と呼ぶが、「大山船龔三郎船頭房」の「船頭」とはこの「綱首」の日本語訳と考えられる。林氏は「大山船」とは、鎌倉後期から南北朝時代にかけて盛んに派遣された寺社造営料唐船の先駆けをなす貿易船で、大宰府宝満山の麓にあった天台宗の九州における拠点寺院「大山寺」（別名「有智山寺」）が所有する船ないしは船団を指すという。「龔三郎」は「大山船」の船頭で、「船頭房」とは「大山船の船頭の博多唐房における宿房（住房、客房）で、大山寺の博多における貿易事務所を兼ねていた」とされた。

大宰府有智山にある大山寺は比叡山延暦寺の末寺であった。同様に筥崎宮は男山八幡宮と本末関係にあり、大宰府の観音寺は東大寺の末寺であった。このように中央の権門勢家の力は、大宰府・博多方面に強く及んでいたのである。一方「唐房」の文字一つから、治外法権を持つ租界的聚住形態、方形地割の街区やシャバンダルの存在等々を想像することは無理で、単なる在留宋人の集住地と考えられる。また日本側文献史料

上に表れる宋商たちの姿は、権門の「神人・寄人」であり、博多「唐坊」には、唐代の「蕃坊」「新羅坊」などと同様な、治外法権や自治権の存在は認められない。

林氏は既に述べたように「観音玄義疏記」の「船頭房」の理解として、権門の一つである「大山寺」が博多津の「唐房」に貿易事務を執り行う「宿房」を持ち、龔三郎をそこに住まわせていたとした。宋商の龔三郎は「船頭房」という建物の客人で、主人はむしろ大山寺側にあったとしたのである。ここから、私が南蛮貿易港を考察する際に想定した廻船問屋・船宿の如き存在¹⁴⁾を、博多浜西側の冷泉津周辺においても想定することが可能となつてこよう。ここまで来れば「住蕃貿易」と云っても、宋商の主体性はほとんどなかったことになるが、今後の研究に待ちたい。

§3 「野上文書」の分析

蒙古襲来に関係する興味深い文書として「野上文書」所収の次の「御教書」を取り上げたい。弘安の役直後の臨戦体制下にある博多の緊張した様子のわかる史料である。受取人の野上氏は豊後の御家人である。一方、文末の結びが「仍執達如件」とあることから、鎌倉幕府から直接野上氏に充てたものか、幕府の命を受けた守護が配下の野上氏に充てたものかがこの文書を理解するポイントとなってくる。換言すれば、この文書の差出人の「左近将監」とは誰かが問題なのである。古くは北条の一門の北条時国とされた¹⁵⁾が、最近の研究では豊後・筑後の守護大友親時となっている¹⁶⁾。

ここでは最近の説に従いたい。それゆえこの「御教書」は幕府の命を受けた守護が、さらにその命令を配下の野上氏に伝えるために発給したものとなる。

条々

- 一 賊船事、雖令退散、任自由不可有上洛遠行、若有殊急用者、申子細、可被隨左右矣。
- 一 異国降人事、各令預置給分、沙汰未断之間、津泊往来船、不謂昼夜、不論大小、每度如検見、如然之輩、輒浮海上、不可出国、云海人漁船、云陸地分、同可有其用意矣。
- 一 從他国始来入異国人等事、可加制止矣。
- 一 要害修固并番役事、如日来無懈怠、可被勤仕候矣。

条々及緩怠之儀者、定後悔候歟、仍執達如件

弘安四年九月十六日

左近将監（花押）

野上太郎殿

第一条は「賊船は退散したが」任地を勝手に離れてはならないとの命令である。元の水軍を波打ち際で撃退し、残った兵に対する掃蕩戦を終了して間もなくと云う時間の中で、この「御教書」が出されていることを考えなければならない。戦いに参加した個々の武将の側には、当然緊張が弛み「ほっ」とた安堵の気持ちが生れ、戦時から平時へという流れが生れて来る。これに対して、幕府方は臨戦体制をと引締めをはかっているのである。これと直接連続するのは、第四条の元寇防塁に関する「要害修固」の役や異国警固番役をこれまでとおり行なえとの命令である。

第二条は「異国降人」についての定めで、この文書で特に注目すべきところである。蒙古軍の中には降参した将兵がおり、それを各武士団に「預け置いている」とあることが興味深い。『元史』には日本で捕まった東路軍の蒙古人・高麗人・漢人は切られたが、江南軍の南人は捕虜となったとあるが、ここでは「沙汰未断」とある。杉山正明『モンゴル帝国の興亡下』¹⁷⁾によれば、弘安の役は南宋の負の遺産を日本に相続させようとの元の政策で、江南軍10万の実体は使いものにならない旧南宋軍を日本に入植させようとする「移民」部隊で、元にとっては「棄民」だったと云う。

南人の捕虜が鎌倉武士に預けられたことは、宋人の日本への帰化とも共通していることになる。中世日本が宋人に対して親和的であったことが、弘安の役における南人の取扱にも認められるわけである。第二条の「津泊往来船、不謂昼夜、不論大小、每度如検見」は蒙古将兵への掃蕩戦の続きを現わしている。「如然之輩、輒浮海上、不可出国」とあって「異国降人」が海路を逃げ帰ろうとするから、出国させないよう「云海人漁

船、云陸地分」検問の強化が命じられている。当然、各々に預け置いた「異国降人」に対し厳格に拘束、監視すべしとの命令は言外に含まれている。

第一条で命じた臨戦体制は、第二条では「異国降人」に対する監視の強化へと具体化されている。第三条の「他国より博多に始めて入港した」「異国人等事」に対しては、「制止を加うべし」とある。これは筑前国以外の日本の他の地域から博多に入港した場合においても、外国船や外国人商人たちは厳しい統制下に置くよう命じたもので、一般的に外国船や外国人商人が厳しい統制下に置かれたことは明らかである。その前提には博多「唐坊」＝「大唐街」は幕府の統制下に置かれ、宋人たちの居留地は本来港という自由な場所にあったにも拘らず、収容所の様な有様になっていたと想像される。

それゆえ第二条の「津泊往来船、不謂昼夜、不論大小、毎度如検見」とか「不可出国、云海人漁船、云陸地分、同可有其用意矣」と云う言葉の背後には、「唐坊」＝「大唐街」に対する幕府の統制の事実、さらには「唐坊」の収容所化を見て取ることができよう。林氏は強制送還の可能性も考えておられるが、むしろ日本社会への帰化強制が主流ではなかったであろうか。

むすび

これまで行ってきた博多「唐坊」についての研究史の整理と、「野上文書」の分析の結果をまとめることでむすびとしたい。

大庭氏の「唐坊」＝「大唐街」の理解では、「櫛田神社・冷泉津と聖福寺・承天寺にはさまれた500メートル四方の地域」からなる宋商らの集住エリアでは、他と区別する掘り割とか土塁とかが発見されない以上、宋商の居住地域と日本人との混住・雑居とが空間的に連続スペクトルの様に連なっていたことになる。「唐坊」にしる「大唐街」にしる、いずれも中国人たちが自分たちの集住エリアについての呼び名であるが、同時代の日本側の史料には、この「唐坊」に対応するものが見られない以上、日本人たちはこの地域を特別視していなかった可能性がある。

博多の「唐坊」＝「大唐街」の住人である宋人たちは、出身地、血統の点では確かに中国人であり、一時的な日本への滞在者のはずなのだが、他方日本側から見れば、権門の神人・寄人であり、日本人一般と原理的には区別出来ない存在であったと思われる。つまり博多「唐坊」の住人は二重国籍的、両属的な存在であり、自称と他称とに違いがあった人々となろう。このことが同じ「唐坊」と云っても、東南アジア各地に見られたものと違い、博多「唐坊」には自治権や治外法権がなく、「住蕃貿易」と云うほどの主体性のない存在となって表れたものと思われる。

これは当時の日本が国家による人民管理の点で束縛が少ない自由な社会であったことにもよっているが、日宋関係が冊封体制外の自由貿易として行なわれていたこととも深い関係にある。日宋貿易の事実を示す宋銭、陶磁器等に目が奪われると、特に陶磁器が当時の世界における最高の技術によって作られたものであるだけに、宋商たちの威力に圧倒されてしまうのはやむを得ない面もあるのだが、当時の日宋貿易において、宋商たちは日本の「金」を求めて航海をしてきたのであるから、彼らの立場は弱く、宋銭や陶磁器等は「金」の見返り品としてもたらされた¹⁸⁾ ものなのである。

さらに考えるべきは、当時の日中間の文化の差の問題である。当然中国人側には両者の違いを「中華」と「夷狄」の差として区別しようとする考えがあったはずで、この華夷の区別に基づき、中華の民は夷狄の民である現地人から己を隔離すべきだとすると、それが「唐坊」成立の宋人側の根拠となったはずである。しかし博多禅の存在は、博多居留の宋人たちにとっても大きな意味を持ち、日中間には宗教的、文化的な同一化が進んでいたことから、宋人の日本への同化、日本への帰化の圧力の方が宋人を日本人から隔離しようとする圧力よりも強かったと思われる。

得宗専制期の鎌倉幕府が宋朝禅を大々的に取り入れたことや、南宋の滅亡後も日本は宋朝禅を取り入れ、日元間には大量の渡来僧・留学僧の往来があった¹⁹⁾ こと等々で、居留宋人に対する日本への同化、帰化の圧力はますます強まる方向にあったと思われる。このような背景の中で蒙古襲来があったのであるから、蒙古襲来を契機として、博多居留の宋人たちは大挙して日本に帰化し、博多「唐坊」は居留地としての面影をなくしていったと思われる。

博多「唐坊」と蒙古襲来 注

- (1) 柳田純孝「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二編『よみがえる中世【1】東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988年（以下、前掲書と略す）所収
 - (2) 林 文理「博多綱首の歴史的位置—博多における権門貿易—」大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』所収
 - (3) 大庭康時「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』No. 448 1999年12月
 - (4) 佐伯弘次「大陸貿易と外国人の居留」前掲書 所収
 - (5) 小葉田淳「近世初期中国人の渡来・帰化の問題—唐人町研究の一駒—」『金銀貿易史の研究』法政大学出版局 1976年 所収
 - (6) 前掲書
 - (7) 『岩波講座 日本通史 6』1995年 所収
 - (8) 伊原 弘『中国人の都市と空間』原書房 1993年
 - (9) 川添昭二『中世九州の政治と文化』文献出版 1981年
 - (10) 柳原敏昭「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』山川出版 1999年
「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」『日本史研究』1999年12月
 - (11) 「海に開かれた都市」前掲書 所収
 - (12) 「鎌倉初期の対外関係と博多」箭内健次編『鎖国日本と国際交流 上巻』吉川弘文館 1988年 所収
 - (13) 伊藤幸司氏は「中世後期の臨濟宗幻住派と対外交流」（『史学雑誌』108-4）において、中世後期の対外交流には博多聖福寺と密接な関係を持つ臨濟宗幻住派の禅僧の活躍があることを明らかにされたが、聖福寺関係者の登場の背景には、この寺自身の日明、日朝貿易に占める「貿易品の市場」という特別な役割りが関係しているのではあるまいか。
 - (14) 安野真幸『港市論』日本エディタースクール出版部 1992年
 - (15) 『鎌倉遺文』第十五巻 No.14456
 - (16) 石井 進、他編『中世政治社会思想 上』岩波書店 日本思想大系 1972年 所収「追加法」53頁
 - (17) 講談社現代新書 1996年
 - (18) 安野真幸「東アジアの中の中世日本」『弘前大学教育学部紀要』第82号 1999年
 - (19) 安野真幸「戦国期日本の貿易担当者」『クロスロード』2号 2000年
-